

## 自己と世界を問う — 仏教経済学の可能性 —

研究員 松岡佑和



武蔵野大学では世界の幸せをカタチにするための5つのチャレンジの1つ目として「自己と世界を問う」を掲げています。「自己と世界を問う」ことが、しあわせ研究の重要な第1歩と考えているためです。

幸せをカタチにする具体的な方法の1つであるSDGsの文脈で考えると、「世界を問う」というのは世界で起きている問題を発見するというプロセスであることが容易に想像できます。昨今SDGsへの取り組みが全世界的に広がる傾向の中、「世界を問う」という点は特に目新しいものではありません。本学では“世界”の前に“自己”が掲げられており、これが「幸せをカタチにする」ことに対して本学のより進んだ考え、“仏教精神の重要性”を現しています。

仏教は徹底的に「自己を見つめる、問いただす」ことであると言われます。仏教を学ぶと自分自身がよくわかり、その立ち位置から、他者や世界との関係もより明確になります。「世界を問う」前に自己を問うことによって、より明確に「世界を問う」ことが出来るとも言えるのではないのでしょうか。

「自己を問う」ことが仏教であるならば、「世界を問う」とは研究の実践的な場とも言えます。私で言えば、経済学をベースにした政策です。世界の諸問題を政策の観点から考えることは、まさに「世界を問う」ことに他なりません。

「自己を問う」ことが仏教、「世界を問う」ことが経済学と考えると、世界の幸せをカタチにするための最も重要な第1歩「自己と世界を問う」において、仏教と経済学が不可分に結びついていることがわかります。一見関係がなさそうに見える学問が最も重要な第1歩で結びついているのです。

仏教経済学とは何かと問われるとまだ明確な答えは出せません。それはこの分野の研究が十分に議論されていないためです。仏教学と経済学では研究の方法が根本から異なり、これが2つの学問分野を跨ぐ研究を難しいものにしてしています。しかしあえて言うのであれば、我々の行動規範に仏教思想を反映させ、その経済的帰結を政策の観点から考えると言えるでしょうか。その行動規範の代表的なものは共生・利他の視点です。これはSDGsとも結びつきます。内なる心のあり方を重要視する仏教学と科学性を重要視する経済学をどう有機的に結びつけて行くか。本学経済学部の教員として、この難問に立ち向かっていかなければなりません。